

「のこりもの」

和田雄貴

【登場人物表】

清野 紡音（8・17・18・20）専門学

生

曾根 葵（8・20）役者

清野 結子（30・39・40・42）紡音
の母親

曾根 叶（33）葵の母親

村長（70）（82）村の村長

浜田 さゆり（17）紡音の親友

岸田（53）結子の職場の同僚

緒方 亮（25）役者

大畑（42）専門学校の講師

宮本（33）演技指導者

小梨（20）役者

荒井（21）役者

佐藤（19）役者

大葉（23）役者

兵頭（18）	役者
萩原（28）	役者
大島（25）	役者
村人A	
村人B	
先生	
ラジオDJ	
監督	
AD	
カメラマン	
部下役	
女性	
スタッフ	
審査員	
妻	
夫	
同期A	
同期B	

○病室／冬

小さな村の病院の一室。

ベッドに曾根叶（33）が横になっている。

ベッドの周りに清野結子（30）、清野紡音

（8）、曾根葵（8）が集まっている。

結子、紡音に毛糸の編み方を教えている。

テーブルの上に色とりどりの毛糸。

袋の中にはすでにたくさんの編み物が詰まっている。

紡音「なんでこれを燃やしちゃうの？」

結子「この村伝統の祭りだけんね」

葵「でんとうってなーに」

叶「昔からずっと続いていることなんよ」

葵「でもこんなにいっぱい作ったのに、もっ

たいない」

結子「こうやって一つ一つ大事に作ったものを燃やすことで、物の大切さを知ろうってことなんだよ」

葵、持っている毛糸をじっと見る。

葵「……燃やしたら、なくなるのに」

叶「なくなっても、作った思い出は消えないよ」

葵、納得していない顔のまま、また手を動かし始める。

叶、葵を静かに見ている。

○車内／夕方

紡音と結子、病院からの帰り道。

Mr. Children『Replay』が流れている。

結子「今日夕飯なに食べようか」

紡音「んースパゲッティ！」

結子「スパゲッティ！カルボナーラなら買ったのが家にあったかな」

紡音「ミートソースがいい！」

結子「（笑いながら）ミートソースね。分かった！じゃあスーパー寄って帰ろっか」

紡音「やったー！」

○スーパー／夕方

2人で食材をカゴに入れていく。

紡音、野菜コーナーからいつの間にかいなくなり、お菓子エリアから大量のお菓子をカゴに放り込んでいる。

結子、それを見て笑っている。

○清野家／夜

2 DKのアパート。

玄関を開けて2人が帰ってくる。

紡音・結子「ただいま」

結子「(ストーブの方へ向かいながら) さむ

さむ」

結子、ストーブの電源を入れる。

紡音、袋からさっそくお菓子を取り出して

食べ始める。

結子「あーっ、夕飯前でしょ」

紡音「(ニコニコしながら) おいしい」

結子「そんなに食べたなら夕飯食べれんような

るよ」

紡音「食べれるもん」

結子「ほんとかいね」

紡音「好きなものはいっぱい食べたいもん」

紡音、他のお菓子の袋も開ける。

結子「こーら、そんな何個もすぐ食べない」

結子、紡音の手からお菓子をとり上げる。

紡音「だってこれすきなんだもん……」

紡音、だんだん声が小さくなり、泣き出す。

結子「そんなにこれ食べたいの？」

紡音「……うん」

結子「まーずけ（しょうがないな）」

結子、お菓子を返す。

紡音「やったー！」

結子、食材を冷蔵庫にしまっていく。

紡音が近づいてくる。

紡音「あげる」

紡音、お菓子を1つ差し出す。

結子「えーいいの？」

紡音「（頷く）」

結子「ありがとう」

結子、紡音の頭をよしよしする。

×

×

×

ミートソースがぐつぐつ煮えている。

結子、コンロを切る。

結子「はい、できたよ」

紡音「やったー！」

結子、二人分のミートソースをお皿に盛り付け、テーブルに置く。

結子「せーの」

結子・紡音「いただきます」

紡音、一口食べる。

紡音「おいしいー！」

結子「（笑顔で）またいつでも作るけんね」

紡音「毎日食べたーい！」

○村の公民館・外／祭りの前日

村長（70）を中心に、村の男たちが篝火台を組み立てている。

村長「4年に一度の祭り。今回もよう集まってくれた！」

村人たちが頷く。

村長「この火はね、なくなったものへの感謝

と、残ったもんへの約束なんよ。燃やすからこそ、ちゃんと覚えとけるんだ」

村人▷「村長！今年の火付けは誰がするんですか」

村長「葵に頼もう思うとる」

○同・中

結子、祭りの準備をしている。

紡音、結子を見ている。

村人B「結子ちゃん、叶ちゃんと仲良いもんね。元気しとる？」

結子「ええ、まあ」

紡音、そのやり取りを見ている。

○同・外

男たちが一本締めの実習をしている。

村長「いくぞ、よーっ！」

手を叩く音。

間が合わず、笑いが起きる。

村人▷「村長、今年もずれたわ」

村長「やかましいわ、本番はちゃんとするけん」

○病室

叶、ベッドの上で毛糸を編んでいる。

結子が椅子に座り、同じように手を動かしている。

結子「叶ちゃん、それ何を作っちやるん？」

叶「キーホルダー」

結子「キーホルダー？」

叶「うん」

結子「袋に入つとるのと違うん？」

叶「あれは祭りで燃やすためのもの。これは違う」

叶の手元。小さな丸いモチーフが形になりかけている。

結子「葵くん？」

叶「うん。あの子、私がいなくなったら、きつとひとりで抱え込むけん」

結子「うん……」

叶「結子ちゃんも少し手伝ってくれんかな。」

2人で作ったほうが、丈夫になる気がする。」

結子、毛糸を受け取る。

叶「葵にはね、ちゃんと誰かを頼れる子になってほしいんよ。でも私がそれを教えてやれなかったから……せめてこれを持っていたら、思い出せるかなって」

結子「何を？」

叶「誰かのぬくもり」

風が強く、窓を揺らす。

叶「結子ちゃん」

結子「ん？」

叶「最後の結び目、結子ちゃんが閉じてくれる？」

結子「うん」

結子、最後の毛糸の目をゆつくりと引いて止める。

小さなキーホルダーが完成する。

2人、手のひらに乗せてじっと見ている。

叶、それを胸元にそっと抱く。

○村の広場／夜／祭りの日

篝火が焚かれ、村人たちが集まっている。
子どもから老人まで、思い思いに編んだものを持ち寄っている。

紡音、結子、葵も参加している。

紡音の手には、毛糸で編んだ靴下。

紡音「お母さん、ほんとにこれ燃やすの？」

結子「そう」

紡音「もったいないね」

結子「そうだね。でも、燃やすから大事にし

たって思えるんだよ」

紡音「……よくわかんない」

結子「うん。わかんなくていい。大人になつたらわかるけん」

村長、篝火の前に立つ。

村長「さあ！今年もみんなのおかげで祭りの日を迎えることができた！（一番大きな篝火台に向かって）この大台は、みんなの思いを乗せて燃え続ける！それはとてもありがた

いことだ。そしてこの大事な火を灯すのは：
…葵！」

葵が前に出る。

葵、松明を受け取り、1番大きな篝火台に
近づく。

手がわずかに震えている。

村長「大丈夫だ」

葵、一呼吸おいて火を入れる。

篝火が、勢いよく燃え上がる。

村長「よう頑張った」

葵「（頷く）」

村長「さあ皆さんお手を拝借！それでは！村
の安寧と皆さまのご健勝、心の祈りを願っ
て！よーっ！」

村人たち、一本締めをする。

手を叩く音。

少しだけ揃った。

笑いと拍手が起きる。

篝火の中に、一つ一つ編み物が投げ込まれ
ていく。炎が揺れる。

紡音、自分の作ったものをしばらく握りしめて、そっと篝火に投げ入れる。

炎が一瞬大きく揺れ、また静かになる。

その時、結子の携帯が鳴る。

結子、画面を見て表情が変わる。

紡音「お母さん？」

結子「ちよっと待っちゃって」

結子、少し離れたところで電話に出る。

紡音、篝火をじっと見ながら待つ。

戻ってきた結子の目が赤くなっている。

紡音「どうしたの？」

結子「……叶ちゃんがね」

紡音「……」

紡音、葵を見つめる。

葵、炎を見つめる。

炎が風に揺れる。

○火葬場　裏手

葵、叶が入っている棺が燃えている様子を
見ている。

葵のそばには結子がいる。

2人を見ている紡音。

×

×

×

雨が降っている。

葵、傘を差さず雨に打たれながら立っている。

紡音、傘を持って出てくる。葵を見つけ、近づいていく。

葵の頭の上に傘を差し出す。

葵、振り返る。

葵の頬に雨なのか涙なのかわからない雫が流れている。

葵、キーホルダーを握っている。

葵「……ありがとう」

紡音「（頷く）」

○学校・教室／朝／数日後

葵の席が空いている。

先生が教壇に立つ。

先生「えー、曾根くんですが、事情により本

日付で転校となりました。親戚のいる東京に行くことになったそうです」

教室がざわめく。

紡音、葵の席を見る。

机の上には何もない。

窓の外、学校の門のあたりを葵が荷物を持って歩いている姿が一瞬見える。

紡音、立ち上がろうとするが止まる。

葵の姿はもう見えない。

紡音、お腹が痛くなり急いでトイレへ向かう。

○同・トイレ外観／朝

紡音、トイレからしばらく出てこなかった。

○清野家・寝室／朝

9年後。

紡音（17）、布団で寝ている。

外はもう明るいが、カーテンは閉まったまま。

結子（39）、紡音を起こしにくる。

結子「紡音！起きんかね！遅刻するよ！」

紡音「……（起き上がる気配がない）」

結子「朝ごはん出来とるよ！」

紡音「……うう」

結子「できとるよ！」

紡音「……（布団にこもっている）」

足音が遠ざかっていく。

紡音、天井を見る。

起き上がる。

○同・台所／朝

結子がトーストを焼きながら目玉焼きを作っている。

結子「おはよう」

紡音「……」

結子、皿を出す。

トースト、目玉焼き、サラダ。

結子「食べんさい」

紡音「……いい」

結子「いいじゃなくて、作ったんだけん食べんさい」

紡音「……」

結子、トーストを差し出す。

結子「ほら」

紡音「（舌打ち、座る）」

紡音、トーストを一口かじる。

結子「目玉焼きは」

紡音「（首を振る）」

結子「まーずけ」

紡音「……」

結子「お母さんあとちよつとで出るけんね」

紡音「……」

結子「今日は遅いけん」

紡音「……」

紡音、トイレへ。

結子、仕事の準備をしている。

結子「じゃあ行ってくるよ！」

紡音「……」

ボタンと閉まる音。

同時に紡音もトイレから出る。

朝ごはんを食べ、菓を飲む。

○通路路／朝

紡音、歩いていると後ろから浜田さゆり

（１７）が駆けてくる。

さゆり「紡音！待って！」

紡音「（振り返って）さゆり遅い！」

さゆり「起きたら７時半だったんだもん。ね

え聞いて！昨日のドラマのさ」

紡音とさゆり、笑顔で登校している

○学校・購買前

昼休み。

さゆり、購買で買った弁当を電子レンジで

温めている。

隣には紡音。

さゆり「えー！今日も美味しそうな弁当だね」

紡音「ミートソースのパスタ」

紡音、スープレジャーからミートソースを

見せる。

さゆり「自分で作ったん？」

紡音「うん、昨日作って冷凍しといた」

さゆり「すごいな」

○同・教室

2人で弁当を食べている。

紡音、パスタを食べる。

さゆり「おいしい？」

紡音「……うーん」

さゆり「どうしたの」

紡音「……なんか違うんだよね」

さゆり「何が？」

紡音「お母さんの味と」

さゆり「教えてもらってないの？」

紡音「うん。やだから」

さゆり「なんで？」

紡音「だって恥ずかしいじゃん」

さゆり「えーお母さんの味にしたいなら直接

聞きなよ」

紡音「だって家では全然話さんし」

さゆり「思春期か、思春期なのか」

紡音「うるさい」

さゆり「そっかーうちとは大違い」

紡音「さゆりんち仲良いもんね」

さゆり「ほんと、家ではずっとやかましいよ」

○清野家・台所／寝室／夕方

紡音、台所を通りかかって止まる。

冷蔵庫の扉に、結子を書いたメモ。

『野菜炒め2分！』

そのメモをじっと見つめる。

メモを剥がし、ひき肉と玉ねぎを台所に並べる。

しかし、何もしない。

ひき肉と玉ねぎをしまう。

冷蔵庫にある野菜炒めを電子レンジでチンする。

×

×

×

紡音、ご飯を食べ終え、流しに置く。

部屋にあるデスクトップパソコンで『東京調理専門学校』と調べる。

結子が帰ってくる。

結子「ただいま」

紡音、慌ててパソコンを閉じて寝室に入る。
焦ってしまい画面が消えていなかった。

結子、紡音が寝室に入っていくのを見る。

画面には東京の専門学校のホームページがある。

結子、画面を見つめる。

× × ×

紡音、結子が帰ってきて慌てて部屋に入る。

結子（声）「帰ったよ」

紡音「……うん」

結子（声）「ご飯は？食べた？」

紡音「うん」

結子（声）「そう」

しばらく間があり、

結子（声）「食べたら洗いなさい！」

紡音「（ため息）」

紡音、無視して布団に入る。

○医薬品配送センター倉庫／朝

結子の職場。

結子、作業着姿で棚の番号と伝票を照らし合わせながら、段ボール開け検品作業をしている。

同僚の岸田（53）が隣で同じ作業をしている。

岸田「高橋さんとこの娘さん、結婚するらしいが」

結子「え、ほんとですかね。相手は？」

岸田「なんか同じ職場の人ですって」

結子「職場結婚ね。市役所勤めでしたっけ」

岸田「そげそげ、安泰だけん」

結子「いいですねー」

岸田「高橋さん嬉しそうでさー。昨日ずっとそれしか言っていなかったけんねー」

結子「うちの子、将来結婚できるか不安ですけん」

岸田「いくつでしたっけ」

結子「17」

岸田「まだまだだね」

結子「でも家では何も喋ってくれないですよ」

岸田「年頃の子は大変だね」

○病院・搬入口／朝

結子、担当の薬剤師と向かい合って、検品をしている。

1本ずつ取り出し、数を数えラベルを確認する。

サインをもらって台車を押して出る。

○公園／夕方

学校の帰り道。

紡音とさゆりがブランコに座っている。

入り口には2台自転車が停まっている。

子供たちが遊具で遊んでいる。

紡音、コンビニで買ったスूपを膝に乗せ
たまま開けていない。

さゆり「飲まないの？」

紡音「うん」

さゆり「……」

紡音「さゆりってさ、お母さんと仲いいよね」

さゆり「え、うん」

紡音「なんでなの」

さゆり「んー普通じゃない？」

紡音「この間もお母さんと映画行ってたって言うってたじゃん」

さゆり「あー、たまたまお互い暇だったからね」

紡音「なんでそんなに仲良いの？」

さゆり「なんでか……。考えたことなかった」

紡音、子供たちを見つめる。

紡音「そっか」

さゆり「紡音、お母さんと何かあったん？」

紡音「ううん。ただなんか、うちはいつもち

ぐはぐな気がして」

さゆり「ちぐはぐ？」

紡音「いやうん。うまく言えない」

さゆり「喧嘩したの？」

紡音「んーしてないけど……」

さゆりも子供たちを見て、少し考える。

17時のチャイムが鳴り、子供たちは親と一緒に公園を後にする。

さゆり「うちはお母さんと仲良くしようとか、考えたことないかも。喧嘩するけど、気づいたらいつも通りだし」

紡音「……そういうもんか」

さゆり「そういうもんじゃない？」

沈黙。

さゆり「（スープを指して）それ、飲みな」

紡音「……うん」

○清野家・台所／夜

紡音、帰宅する。

結子「おかえり。今日は紡音の好きなミートソースだけん」

紡音「……ねえ、お母さん」

結子「ん？」

紡音「ちよっと話したいことがあって」

結子「なに？その前に手洗いなさい」

紡音「でもそんなことより……」

結子「そんなこと。手洗わんとばい菌入るけん」

紡音「わかつとる、あとで洗うけん」

結子「すぐ終わるんだけん、さっさと洗ってきなさい」

紡音、洗面台に行く。

○同・洗面台／夜

紡音、石鹸で手を洗っている。

自分の顔を鏡で見る。

○同・台所／夜

紡音、洗面台から戻ってくる。

結子「先食べなさい」

紡音「ねえ話聞いて」

結子「今お母さん手離せらんけん」

紡音「いいいよ、そのまま聞いて」

結子「ご飯食べなさい」

紡音「いいから」

結子「冷めんうちに、ほら」

結子、皿を紡音の前に置こうとする。

紡音「いいって言ってるじゃん」

結子「何よ。食べながらも話せるでしょ」

紡音「……」

結子「昨日もあんまり食べてなかったでしょ。

ちゃんと食べなきゃ」

紡音「だけん今はそういう話じゃないって言
つとるじゃん！なんで毎回こうなるの」

結子「こうなるって、心配して何が悪いの」

紡音「私の話、聞く気ないでしょ」

結子「そんなこと……」

紡音、ミートソースの皿を掴む。

そのまま流しに叩きつける。

ソースが飛び散る。

一瞬、台所が静まり返る。

紡音、荒い息をしている。

手が震えている。

紡音「……毎回毎回、ご飯ご飯ご飯。私の話
なんか最初から聞く気ないでしょ」

結子「……紡音」

紡音「うるさい」

紡音、台所を出ていく。

結子、流しにこびりついたミートソースを
見ている。

しばらく、立ち尽くす。

○同・トイレ外観／夜

トイレの中から紡音の啜り泣く声。

○同・台所／夜

結子、流しのミートソースをスポンジで拭
いている。

○同・同／翌朝

結子、トーストを焼き、目玉焼きを作っ
て
いる。

紡音、起きてくる。

椅子を引いて座る。

しばらく沈黙が続く。

トーストが焼ける音。

結子、皿を出す。

トースト、目玉焼き、サラダを盛り付ける。

紡音の前に置く。

結子も向かいに座る。

紡音「……昨日、話したかったのはさ」

結子「……」

紡音「さゆりのお母さんってさゆりと仲いいじゃん。なんでか聞いたら、考えたことないって言われて」

結子「……」

紡音「うちって、なんでいつもちぐはぐになるんかなって」

結子、紡音を見ている。

紡音「お母さんが嫌いとか、そういうんじゃないけど……なんか、うまくいかなくて」

結子「……うん」

紡音「それだけ」

結子「うん」

沈黙。

結子「お母さんもね、うまくやろうと思ってやってるわけじゃないんだよ。ただ、ご飯食べてほしいとか、ちゃんと寝てほしいとか、そういうことしか考えとらんけん」

紡音「わかつとる」

結子「でも昨日は、紡音の話を聞く前に言いすぎたね」

紡音「……お母さんは毎回そう」

結子「うん。毎回そう」

紡音「……わかつとるなら直して」

結子「善処する」

紡音「ゼンショってなに」

結子「努力するってこと」

紡音「努力じゃなくて直して」

結子「そう簡単には直らんよ」

紡音「そつか」

結子「うん」

紡音「……ミートソース」

結子「ほんとよ。どんな気持ちだったか」

紡音「ごめん」

結子「シンクにもこびりつかして」

紡音「だからごめんって言っとる」

結子「わかった」

2人、黙って食べる。

結子「また作るけん」

紡音「うん」

結子「今度は温かいうちに食べなさいよ」

紡音「わかつとる」

紡音、朝ごはんを食べ終えて菓を飲む。

○学校・廊下

さゆりと紡音、並んで歩いている。

さゆり「そういえば、お母さんと話せたん？」

紡音「うん」

さゆり「どうだった」

紡音「なんかうーん……ちぐはぐなままだった」

さゆり「（頷く）」

紡音「でもなんか、ちぐはぐでもいいかって
なった」

さゆり「どういうこと」

紡音「んーうまく言えんけど」

さゆり「喧嘩はしたの？」

紡音「した。めちやくちや」

さゆり「え」

紡音「ミートソース、流しに叩きつけた」

さゆり「……やばくない？」

紡音「うん」

さゆり「お母さん怒った？」

紡音「怒らんかった」

さゆり「怒んなかったんだ」

紡音「なんかでも」

さゆり「うん」

紡音「起きたら普通に朝ごはん作っとった」

さゆり「（微笑みながら）いいお母さんだね」

紡音「うん」

沈黙。

紡音「さゆり……ありがとう」

さゆり「え、なんで」

紡音「さゆりが考えたことないって言うてくれたおかげ」

さゆり「それで感謝されても困るんだけど」

紡音「でも、それ聞いてなかったら話せんかったと思う」

さゆり「（笑いながら）なんか、私そんな大したこと言ったっけ」

紡音「言ってない」

さゆり「えー」

紡音「……わかんない。でもありがとう」

さゆり「（少し照れながら）どういたしまして」

○清野家・台所／夕方

紡音、冷蔵庫を開ける。

特に取り出すものもなく閉める。

棚を見ると、インスタントラーメンがある。

台所に置く。

フライパンを取る。

冷蔵庫を再び開けて、玉ねぎとにんじん、ひき肉を取り出す。

玉ねぎを切り始める。

次ににんじんを切る。

フライパンに油を入れる。

火をつける。

玉ねぎ、にんじんを入れる。

× × ×

結子、仕事から帰ってくる。

結子「……ただいま？」

台所に行くと、紡音が鍋をかき混ぜている。

結子「紡音？」

紡音「おかえり。もうすぐできるけん」

紡音、皿にパスタを盛りテーブルに置く。

紡音「はい」

結子「え」

紡音「食べて」

結子、一口食べる。

また一口。

紡音「……まずい？」

結子「ううん」

紡音「……おいしい？」

結子「うん」

紡音「（安心する）」

結子、フォークを置く。

結子「なんで急に」

紡音「……いや何となく」

結子「紡音」

紡音「ん？」

結子「将来どうしたいとかある？」

紡音「え」

結子、紡音を見ている。

紡音「……笑わん？」

結子「何を笑うことがあるかね」

紡音「料理人になりたい」

結子、何も言わない。

紡音「東京に専門学校があつて、高校卒業し

たらそこに行きたい。でも学費が高くて。だ

けん言えんかった」

結子「ふーん」

紡音「うん」

結子「でもなんで料理人なの」

紡音「え、いや……」

結子「なに」

紡音「だから……その……」

結子「しっかりしなさい！」

紡音「（驚く）……お母さんのミートソースが、

ずっと頭から離れんくて」

結子「……」

紡音「何回作っても、近づいとる気がせんくて。でも、また作りたくなるの。やめれんけん、たぶん向いとるんかなって」

結子「そつか……本気なんだね？」

紡音「うん」

結子「大変な道だよ」

紡音「うん」

結子「わかった。じゃあ今度はお母さんが作るけん」

○同・台所／夜／日替わり

夕飯の時間。

結子の作ったミートソースが並んでいる。

紡音、椅子に座ってそれをじっと見ている。

結子「なんかね、そんな見て」

紡音「トマト、何使つとるの」

結子「缶詰」

紡音「生のトマトと違う？」

結子「全然違うよ」

紡音「どう違うの」

結子「生の方が酸っぱい」

紡音、メモ帳を取り出して書く。

紡音「玉ねぎ、どんくらい炒めとる？」

結子「きつね色になるまで」

紡音「時間じゃなくて？」

結子「そう」

紡音「……色で見る」

紡音、また書く。

結子「おばあちゃんから教わったんよ」

紡音「そうなの？」

結子「お母さんも最初全然うまく作れなくて」

紡音「……今も酸っぱい気がする」

結子「正直に言いすぎ」

2人、少し笑う。

× × ×

紡音が寝静まった後。

結子、電卓と求人誌を広げている。東京の専門学校のパンフレットが隣に置かれている。

学費のページを開いて数字を見る。

電卓を叩く。

求人誌の一角に丸をつける。

台所を見る。メモ帳が置きっぱなしになっている。

近づいて手に取る。びっしりとメモ。

『きつね色になるまで』

結子、それを読んで微笑む。

電気を消す。

○ 山道／秋

1台の軽自動車が走っている。

○車内

結子が車を運転しており、紡音は助手席に座っている。

車内は *Mr. Children* が流れている。

『*Another Mind*』が流れ始めたところでトネルに入り、電波がなくなる。

Bluetooth で繋がっていた為、曲が止まる。

結子「あらま」

紡音「消えちゃった」

結子「こっちにするか」

結子、車内のナビを操作しラジオを流す。
ラジオ番組『音楽の紙飛行機』が流れる。
ラジオ *DJ*「では次のメール行きましょう。ラジオネーム、サイのゴンゾウさん。僕は4歳、1児の父です。息子が来年の春から上京するため、1人暮らしをします。親としては夢のために背中を押したい気持ちがあります。やはり悲しい気持ちもあります。僕は息子が小さい頃に離婚し、それ以降2人

でずっと過ごしてきました。反抗していた時期もありましたが最近はず2人の時間も増えて、久しぶりに家族らしいことができていたので、より寂しいです。何か解決策や乗り越えるために良い方法はありますか？このことです、いやーこれは確かに寂しいですねー」

結子「紡音みたいだね」

紡音「うん」

結子「そげに東京はいいところなんかね」

紡音「なんでもあるけん楽しいんじゃない？」

結子「ありすぎるとお金がなくなるが」

紡音「それは考えて使うよ」

結子「紡音に出来いかいね」

紡音「わからんやつてみんと」

結子「困ってもうちお金ないけん、あげれん

よ」

紡音「仕送りはしてもらわんと」

結子「無駄遣いしたらいいけんよ」

紡音「わかつとるわね」

結子「あ、家計簿つける練習せんと」

紡音「いいわね」

結子「今日家計簿も買うこと忘れんでね」

紡音「いいって」

ラジオDJ「それではサイのゴンゾウさんに届

ける曲はこちら。Mr. Childrenで『終わり

なき旅』

紡音「あ……」

結子「また流れたね」

紡音「うん」

『終わりになき旅』が流れている。

長い長いトンネルから抜け、一面紅葉が広がっていた。

紡音「きれい」

結子「今年は量が多くてきれいね」

量というのは紅葉の数のことを言っている。

結子「あ、ちよつと！写真撮ってよ」

紡音「えー」

紡音、嫌そうにしながらも、撮ってみると

意外と上手くとれて満足な様子。

結子「あとで送つという」

紡音「はい」

紡音、窓の外の紅葉をずっと見つめる。

『終わりのなき旅』の最後の歌詞で涙を流していた。

結子、何も言わず運転を続ける。

○市内・ショッピングモール

結子と紡音、服をみたり、文房具屋で家計簿を買ったりしている。

最後に食品売り場へ行く。

ひき肉、玉ねぎ、にんじん、トマト缶がカートに入っている。

○清野家・寝室／夜

結子、布団で寝ている。

部屋の隙間の明かりに気づく。

○同・リビング／夜

紡音、勉強をしている。

目がだんだん開かなくなり机に突っ伏す。

結子、部屋に入ってきて、紡音に毛布をかけ、ソファで横になる。

部屋の電気を消す。

○学校・正門前→体育館→教室／春

卒業式の看板。桜がわずかに舞っている。

× × ×

紡音（18）、校歌を歌っている。

髪が伸びている。

結子（40）、後方の席に座っている。

卒業証書授与。

× × ×

教室に戻り、クラス最後の写真を撮る。

紡音、窓から外を見る。

飛行機雲が長く続いている。

○清野家・台所／出発当日／朝

紡音、トイレから出てくる。

結子「大丈夫？」

紡音「うん」

結子「薬は？」

紡音「飲んだ」

スーツケースが玄関に置いてある。

結子、朝ごはんの支度をしている。

紡音、椅子に座っている。

背中の真ん中まで伸びた髪。

紡音「ねえ……」

結子「ん？」

紡音「髪……切ってくれん？」

結子「え？」

紡音「切って」

結子「なんでよ」

紡音「けじめだけん」

結子「なに、あんた失恋でもしたん」

紡音「失恋だけが髪をバツサリ切る理由じゃないでしょ」

結子「じゃあなんで」

紡音「気合い入れ」

結子「……」

紡音「お願い」

結子「……わかった。その前にご飯ね」

× × ×

朝ごはんを食べ終えた台所。

紡音、椅子に座っている。

結子が後ろに立って、ハサミを持っている。

結子、丁寧にくしを入れる。

毛先をそろえて、ハサミを入れる。

黒い髪が、床に落ちる。

結子、また丁寧にくしを入れる。

× × ×

結子「はい、できた」

綺麗に切り揃えられた髪。

紡音、鏡で自分の髪をいろんな角度から見る。

紡音「ありがとう」

結子「昔はよう切ったけどね。覚えとる？」

紡音「うん」

結子、紡音の髪の手を触りながら

結子「立派な子に育ってくれて、ありがとう」

紡音「（照れながら）なによ」

2人、笑っている。

○同・駐車場

紡音、トランクに荷物を入れる。

結子「これで全部？」

紡音「うん」

結子「じゃあ行こっか」

紡音「あ、ちよつと待って」

紡音、家の前に立ち深呼吸する。

紡音「よし、お待たせ」

車に乗り込む。

エンジンを入れると、Bluetooth がつながり、Mr. Children『くるみ』が流れる。

結子、車を発進する。

○車内／『くるみ』が流れている
見慣れた道が続いていく。

スーパ―。公園。学校。

紡音、窓の外を見ている。

信号が赤になる。

車が止まる。

紡音、窓に少しでも頭を預ける。

信号が青になる。

また走り出す。

× × ×

田んぼ。山。空。

景色が、少しずつ変わっていく。

× × ×

高速に乗る。

紡音、眠っている。

× × ×

空港の看板が見える。

結子、ウインカーを出す。

○ 空港・出発ロビー

出発前の空港。

搭乗手続きを済ませて、椅子に座っている。

無言の時間が続く。

紡音、時計を見て、

紡音「そろそろかな」

結子「うん」

2人、立ち上がる。

○同・保安検査場前

紡音「じゃあ、行ってくるね」

結子「気をつけてね」

紡音「うん。着いたら連絡するね」

結子「行つてらっしゃい」

紡音、手を振って列の最後尾に並ぶ。

パーテーションで仕切られ、外側にいる結子がこちらを見ている。

結子、デジカメを取り出し、紡音に向ける。

紡音、恥ずかしくなり咄嗟に後ろを向く。

再び結子の方へ振り返ると、「もうここっ

ち見て」と口パクで言っている。

紡音、「えー」と口パクでいいながら、保安

検査の列は最前に近くなっていた。

カバンを脱ぎ、上着を脱ぎ、カゴに入れる。
紡音、ゲート前で結子の方へ振り返る。カメラに向かってピースをする。
またすぐゲートの方に振り返り、入っていく。

紡音、我慢していた涙が流れていく。

○ 同・展望デッキ

結子、紡音の乗っている飛行機を探す。

離陸態勢に入った飛行機が一機。

勢い良く空へ飛んでいく。

飛行機が見えなくなるまで目を離さない。

どんどん小さくなっていき、雲の中へ消えていく。

そしてカメラを取り出し、写真フォルダを見る。

真顔の紡音がピースしている。

涙が込み上がってくる。溢れ出る。

カメラを握りしめて泣いている。

○東京／オフィスビル前の道路

2年後。

スーツ姿で歩いている人々。

上司と部下が話している。

腕時計を見て走る女性。

葵（20）、スーツ姿で歩いている。

少し離れた場所でカメラマンがカメラを覗いている。

さらに近くに監督やADがモニターをみている。

監督「カット！」

AD「カットー！」

カチンコの音を聞き、葵たちは動きを止める。

監督「もう1回」

AD「はい……（葵たちに向かって）すいません、もう1度撮るので皆さま同じ場所に戻ってください」

小さな声で返事をする人々。

定位置に戻る。

AD「皆さん準備大丈夫ですか？」

カメラマン「はい回った」

監督「よいい、はい」

カチンコの音。

葵たち、歩き出す。

監督「カット、チェック」

AD「チェッカー！」

監督「OK」

AD「OKです！（葵たちに向かって）皆さん、以上でこのシーン終了になります！次の現場もある方はバスに戻って頂き、このシーンのみと言われた方は本日以上となります。ありがとうございます！」

葵、シャツのボタンを外しながらバスへ向かう。

○オフィス内／深夜

時刻は0時を回っている。

葵、上司役、部下役、女性が残っている。椅子に座って出番が来るのを待っている。

部下役「ながいっすね」

上司役「ですね」

部下役「……僕そろそろ終電やばいんですけど」

女性「私もです」

部下役「ですよね」

女性「え、どうします？」

上司役「どうします……？」

部下役「抜けます？」

上司役「え」

女性「あります」

上司役「いやいやダメですよ」

部下役「え、だって時間が」

上司役「いやわかりますけど流石に……」

部下役「じゃあ言いに行きませんか？」

女性「あります」

上司役「ダメでしょ」

部下役「なんで」

上司役「まだ撮影中だし、しばらくやめた方がいいんじゃないですかね」

部下役「だって、終わる気配あります？」

奥に他のキャストとスタッフがいる。

まだ撮影をしている。

上司役「……ないけど」

部下役「だから僕らは帰ります！ほら、トイレ行ったテイにして」

女性「ありです！！」

上司役「（女性に）あなたうるさいな！」

部下役「いいじゃないですか」

上司役「いいわけないでしょ！大体なんですかトイレ行ったテイって適当すぎでしょ」

部下役「でもあと15分とかで終電ですもん」

女性「私20分」

上司役「いやもうすぐ終わると思いますよ」

部下役「じゃあ終電逃したら、タクシー代で

ますかね」

上司役「いやそれは聞いてないけど……」

女性「やっぱもう黙って帰りませんか？」

部下役「……そうですね」

女性「ほら後日ちゃんと理由を伝えれば分か

つてもらえるところもありますし」

部下役「そうそう、状況が状況なんでね」

部下役と女性、帰り支度をしている。

上司役「え、ちょ」

部下役と女性、帰り支度を終える。

上司役「それはまずいつて」

部下役「ごめんなさい、ほんとにやばいんで。

失礼します」

女性「お疲れ様でした！」

部下役と女性、部屋を出ていく。

上司役「（葵に向かって）帰っちゃいましたね」

葵「あ、そうですね……」

上司役「終電大丈夫なんですか？」

葵「……僕はもうとつくに」

上司役「え」

葵「はい、終わってます」

上司役「そうなんですね……。え、誰かに伝

えてます？事務所とか」

葵「いや、誰にも」

上司役「言わなくても平気なんですか」

葵「最悪歩いて帰ればいいので」

上司役「家近いんですか？」

葵「江古田つてところです」

上司役「エコダ……？」

葵「分かりますかね。池袋とかそっちの方です」

上司役「分かりますより！学生のころ住んでました！」

葵「え、そうなんですか」

上司役「タリーズの目の前のパチンコ通ってましたよ」

葵「あの自転車が店の周り取り囲んで停まってる場所ですか？」

上司役「そうそうそう」

葵「あの周り、変なおじさんしかいないので

あんま近寄らないようにしてます」

上司役「いや僕毎日行ってきましたよ」

葵「じゃあやばい人ですね」

上司役「え、でもここからかなり遠いですよ。

2時間くらいかかりませんか？」

葵「もう諦めてます」

上司役「……え、じゃあもし良かったら、うち来ます？荒れてるけど」

葵「え」

上司役「あ、全然嫌なら大丈夫です。忘れていただいて……」

葵「いいんですか」

上司役「え」

葵「泊めてもらって、いいんですか」

上司役「あ、もちろんです」

葵「(ホッとして)本当に神様ですありがとうございます

うございます！」

上司役「でもまじで汚いですよ」

葵「気にしないで。掃除します」

上司役「なんか……ちよいちよいチクチク挟んできますね」

葵「あ、すみません」

上司役「いいですよ、ぼく緒方亮っていいます」

葵「緒方さん」

緒方「亮でいいですよ」

葵「でも僕の方が多分年下ですよね」

緒方「いくつですか？」

葵「20歳です。あ、曾根葵っていいいます」

緒方「曾根さん、俺25歳です。タメ口でいいよ」

葵「じゃあ亮くん。俺も葵で大丈夫です」

緒方「オーケー。よろしくね」

ADが戻ってくる。

AD「すいません、お待たせしました！あれ？

ほかの2人どうしましたか？」

緒方「あ、なんかトイレ行くテイで帰りました」

AD「え」

緒方「なんか、はい」

AD「あー、わかりました。ではおふたりよろしいですか」

葵・緒方「はい」

○緒方のアパート／深夜

1 ㊦6 畳。

茶色と黒を基調とした、整理された部屋。
ベッド、本棚、プロジェクターがある。

床に余計なものが何もない。

葵「きれいだ」

緒方「パチンカスだからって悪いイメージしてたでしょ」

葵「してました」

緒方「正直だな」

葵「だって荒れてるって言ってたから」

緒方「言ったっけ」

葵「忘れてる……」

葵、本棚を見る。

戯曲、小説、映画のパンフレット。

びっしり並んでいる。

緒方「気になるか」

葵「これ全部読んだの？」

緒方「もちろん」

葵「すごい……役者っぽい部屋だ」

緒方「どういう意味」

葵「いや」

緒方「ビール飲む？」

葵「いただきます」

緒方、冷蔵庫から缶を2つ出す。

2人、床に座る。

乾杯する。

緒方「部屋褒められたの初めてだわ」

葵「荒れてるって言ったのに」

緒方「（笑いながら）なんかごめん」

葵「いえいえ全然」

緒方「しかし今日は長かった」

○東京料理専門学校・実習室

実習服姿の生徒たちが、各自の調理台に立っている。

紡音（20）、まな板の前でキャベツを切っている。

指導教員の大畑（42）が、生徒の間を回りながら見ている。

大畑、紡音の手元で足を止める。

大畑「そうそう、もっとリズムよく」

紡音、テンポを上げる。

大畑「うん。調子いい。もっと肩の力抜いて、

包丁の切先から大きく切るイメージ」

紡音、意識する。均等に切れていく。

大畑「ちよつとこつちきて」

紡音、包丁を大畑に渡し、隣に移動する。

大畑「さつきより角度が下になってきてるか
ら、もうちよつと上げてあげて」

大畑、スムーズに切っていく。

リズムが違う。音が違う。

紡音、大畑の手元を見ている。

包丁の角度や肩の位置、肘の動きが紡音と
まるで違う。

大畑「やってみて」

大畑、包丁を返す。

紡音、まな板の前に戻る。

さつきより肩を落とす。

音が少しだけ変わる。

×

×

×

帰り支度を終えた紡音、スマホを取り出す。

結子から着信の履歴が3件ある。

かけ直す。

結子（声）「あ、紡音」

紡音「どうしたの」

結子（声）「ちよつとね」

結子、咳き込む。

紡音「体調悪い？」

結子（声）「ううん。先生は薬飲んだら楽になるけんって」

紡音「無理しないでよ」

結子（声）「しとらんよ。それより学校ど

う？」

紡音「……ふつう」

結子（声）「ふつうか。うんうん」

紡音「うん。ちゃんと休んでよ」

結子（声）「わかつとる。気つけんさいね」

電話が切れる。

○市民センター・会議室

葵、宮本（33）、小梨（20）、荒井（21）、佐藤（19）、兵頭（18）、大葉（23）、床に輪になって座っている。

宮本、コピー用紙を配っていく。

小梨「あ、桃太郎だ」

宮本「知ってる？」

小梨「もちろんです。日本人で知らない人はいないですよ」

宮本「そっか。全員に行き渡った？」

全員、頷く。

宮本「じゃあまず黙読して」

しばらく、紙をめくる音だけがする。

佐藤、途中で手が止まる。また読む。

荒井、線を引きながら読んでいる。

兵頭、一度読み終えて、また最初に戻っている。

大葉、天井を見ている。

小梨、口を動かしながら読んでいる。

葵、最後まで読んで紙を膝に置く。

宮本「じゃあ最初に思ったことを」

小梨「おじいさんとおばあさん、桃太郎が鬼ヶ島に行く時、引き止めなかったんですね」
宮本「そうだね、なんでだろう」

小梨、考える。

荒井「……桃太郎が自分から行くって言い出してるんですよ。おじいさんは『行っっておいで』って言うてるだけで、決して背中を押しているようには見えません」

佐藤「おばあさんの方は止めなかったんじゃないかって、止められなかったんだと思います」
宮本「どうして？」

佐藤「桃太郎って、桃から生まれてるじゃないですか。最初からおじいさんもおばあさんも、この子がふつうの子じゃないって分かってたんだと思う。だから行くって言い出した時に、ああ、この日が来たって、なんとなくわかってたんだと思います」

宮本「なるほどね、他には？」

大葉「おばあさんは、きびだんごを持たせるしか方法がなかった」

宮本「どういうこと？」

大葉「行かないでって言えないから、腹が減ったら食べなさいって、きびだんごを渡したんだと思う。愛情の向け方が不思議というか。言葉じゃなくて、物に込めてる」

兵頭「……桃太郎が帰ってくるまで、2人何してたんですかね」

宮本「詳しくは書いてないね」

兵頭「絶対、毎日玄関で待ってたと思う」

小梨「首をのばして待ってた、って書いてありますよ」

兵頭「ですよね」

宮本「葵くんは」

葵「……おじいさんが『行っておいで』って言った後に、おばあさんが『気をつけて、けがをしないようにおしよ』って言うじゃないですか」

宮本「うん」

葵「この2人、言ってることが違う」

荒井「確かに」

葵「おじいさんは、行ってこいって送り出して
るけど、おばあさんは、けがするなって
言ってる。同じ場面で違う意味の言葉をかけ
てる」

佐藤「……やっぱりおばあさんの方が、こ
わかったのかもしれない」

葵「……だと思えます」

宮本「それを踏まえて読んでみよう。おじい
さんおばあさんのセリフだけでいいので誰
かやってみて」

佐藤「……私やります」

葵「じゃあ僕も」

宮本「ではおじいさんを葵、おばあさんを佐
藤ね」

葵と佐藤、立ち上がる。

宮本「よいい、はい」

葵「じゃあ、りっぱに鬼を退治してくるがい
い」

佐藤「気をつけて、けがをしないようにおし
よ」

宮本「うん。兵頭くん、桃太郎のセリフやってみて」

兵頭、立ち上がる。

兵頭「……なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持っているから。では、ごきげんよう」

宮本「はい。その後、桃太郎はすぐ出ていくんだけど。元気な声を残して、って書いてあるね。でも桃太郎、本当に元気だったと思う？」

兵頭「……分らないです」

宮本「ほう」

兵頭「元気なふりをしてたかもしれない。おじいさんとおばあさんに、心配かけたくないから」

宮本「うん」

兵頭「でも……振り返らなかったと思います。振り返ったら、きつといけない」

○同・中／夜

紡音、荷物を持って帰ってくる。

玄関を開けると、部屋の中が暗い。

紡音「……お母さん？」

リビングに行くと、結子（42）がソファで横になっている。

顔色が悪い。

紡音「お母さん！」

結子「（目を開けて）……あ、帰ってきたの」

紡音「なんで連絡しないの」

結子「大丈夫だけん」

紡音「顔色おかしいじゃん。病院ちゃんと行つとる？」

結子「行つとる、行つとる」

紡音「明日、私も一緒に行く」

結子「いいよ」

紡音「だめ」

結子「それより学校は？」

紡音「来週まで休みだけん」

結子「そう」

紡音「晩ご飯は？」

結子「まだ」

紡音「まっとなって」

紡音、冷蔵庫を開ける。玉ねぎ、にんじん、

ひき肉、トマト缶を取り出す。

玉ねぎを切る。

× × ×

ミートソースが完成する。皿に盛り、結子のそばに持っていく。

結子、一口食べる。

結子「おいしい」

紡音「ほんと？」

結子「……近くなってきたね」

紡音「え」

結子「お母さんのミートソースに」

○東京料理専門学校・講義室／日替わり
座学。

何も書いていないノートを広げている。

紡音、ぼーっとしている。

○テレビ局・外

葵、オーディション会場に到着する。

LIVE画面。

小梨「かましてこい！」

兵頭「葵ならいけるぞ！」

荒井「落ち着いていけよ」

会場に入っていく。

○同・待合スペース

順番を待つ人たちが座っている。

葵、周りを見渡す。

小声で台詞を繰り返している人、目を閉じて集中している人がいる。

スタッフが名前を呼びに入ってくる。

スタッフ「曾根さん、萩原さん、大島さん、

中へお入りください」

○同・スタジオ

葵、萩原（２８）、大島（２５）が座っている。

審査員「それでは台本の方に移ります。事前にお送りした台本をやっていたきます。えーまずリン役を大島さん、ジュン役を萩原さん、カイ役を曾根さん」

３人「はい」

椅子を動かし、向かい合う形にする。

審査員「準備よろしいでしょうか」

３人「はい」

審査員「はい、では行きます。よいはい」

審査員、手を叩く。

大島「ねえ、ちよつと二人に聞いてほしいことがあつて」

萩原「なに、急に」

大島「すつとごく、大事なこと」

葵「もしかして、深刻な話」

萩原「……まさか会社辞めるとか？」

葵「それとも、彼氏と別れた？」

大島「違う。もつと」

萩原・葵「（息を吞んで身を乗り出す）」

大島「今日、靴下左右で色が違うまま出てき
ちゃって」

萩原「……は」

葵「（大島の足元を見て）ほんとだ」

大島「ずっと気になって、仕事に集中できな
かったの！」

沈黙。

葵のセリフのところで飛んでしまう。

萩原と大島、葵に目配せを送る。

審査員「……」

萩原「それ、深刻な話じゃないでしょ！」

葵「俺たち本気で身構えたのに！」

大島「いやでも私にとっては一大事なの！」

3人、笑う。

審査員「はい、カットーありがとうございますま
した」

3人「ありがとうございました」

頭を下げる。

○同・外／夕方

自動ドアが開く。

葵、立ち止まる。

スマホを取り出す。

しかし連絡は返さず、ポケットにしまう。

すると、オーディションで一緒だった萩原

が出てくる。

萩原「お疲れ様でした」

葵「お疲れ様でした。あ、さっきはありがとう

うございました」

萩原「え？あー全然全然！助け合いですから。

お互い受かると良いですね」

葵「そうですね」

萩原「では」

萩原、去っていく。

○繁華街／クリスマスの夜

葵、人混みの中を歩いている。

紡音、赤いコスプレをしてケーキの呼び込みをしている。

2人の距離が縮まっていく。

すれ違う。

紡音、気づかない。

葵、振り返る。

人混みの中に赤い色がまだ見えている。

葵、再び歩き出す。

○紡音のアパート／夜

クリスマス夜の夜。

紡音、帰宅する。

スマホに通知。

さゆり（LINE）「今電話して大丈夫？」

紡音、返信する。

さゆりから着信。

紡音「もしもし、どうしたの？」

さゆり（声）「紡音……結子さんが」

紡音「え……」

紡音、スマホを握ったまま動けない。

身体がじわじわ震えてくる。

慌ててトイレに駆け込む。

○市民センター・会議室／日替わり

宮本と葵だけが残っている。

葵のスマホにはオーディションの不合格
通知。

宮本「葵くん、オーディションどうだった」

葵「全然ダメでした」

宮本「そっか」

葵「はい」

宮本「なんでダメだったんだろう」

葵「んー……」

宮本「緊張した？」

葵「緊張はしてなかったんですけど……会場
の空気に飲まれたっていうか」

宮本「葵くん、芝居好き？」

葵「……はい」

宮本「なんで好きなの？」

葵「別の人間になれるから」

宮本「別の人間になりたいの？」

葵「……自分じゃない誰かでの時間が、楽

なんです」

宮本「自分でいると苦しい？」

葵「はい」

宮本「なんで？」

葵「僕には何もないから」

宮本「どういうこと？」

葵「僕は故郷も親もいなくて、ふと思い出します」

宮本「うん」

葵「だけど演じてる時だけは忘れられる」

宮本「……」

葵「でも終わったらまた戻ってくる。自分になりたくないんです。だから次が来てほしい」

宮本「来なかったら」

葵「また自分になる」

宮本「なるほどねー」

葵「……」

宮本「葵くんが今言ったこと、全部演じている時に起きてることそのまんま」

葵「え」

宮本「役を生きる。終わる。いつ次の仕事が来るか分からない。そして怖いまま、またいつも通り生活をする」

葵「……」

宮本「これはプロの俳優が考えていることと同じだ。けど一個違うのは、葵くんは芝居の外でだけ怖がつてて、芝居している時は怖がることを恐れている」

葵「怖がることを恐れている？」

宮本「ああ」

葵「ちよつと難しいです」

宮本「葵くんは芝居中に自分を忘れられるんだろ？」

葵「はい」

宮本「なんで」

葵「そこにいるのは、僕じゃなくて役の人間だから」

宮本「それ。それが怖さから逃げているということ」

葵「……」

宮本「怖さの無い芝居は綺麗だ。でも、見てる人に届かない」

葵「（頷く）」

宮本「その恐怖すら受け入れられたら見てる人に届くはずだ」

葵「怖がったまま芝居をする……」

宮本「そう。怖がったまま立てたら変わる」

葵「……」

宮本「次が来るかどうかは、演じた後に決まるからね」

○市内の駅／朝

紡音、東京から戻ってくる。

村長（８２）、紡音を車で迎えに上がる。

村長「ご苦労やったね」

紡音「ただいま」

荷物を積んで、車に乗る。

○車内／朝

無音の車内。山道を走っている。

村長「結子ちゃん、先週くらいからもう話すことも難しくなっとなってね。村のみんなが代わりばんこに見に行ったりしとったんよ」

紡音「うん」

村長「医者さんは疲労やなんやらいうとったけど、紡音には言わんで欲しいって……」

紡音「前こっち帰った時、病院で過労って言われとったんよ」

村長「そげか、まだ症状も最初の頃だったのかもしれんね」

○清野家

紡音、ストーブの電源を入れる。

クローゼットを開け、結子の喪服を取り出す。

鏡を見ながら着る。サイズがぴったり。

横には結子が使っていたタンス。

開けると、ボロボロのクリアファイルと電卓が入っていた。

クリアファイルの中には、付箋でびっしりの求人誌、ノート、学校のパンフレットが入っている。

ノート広げると、5年分の数字でいっぱいだった。

○ 斎場・外へ中

車が到着する。

紡音、出てくる。

さゆりが走ってくる。

紡音を抱きしめる。

耳元で啜り泣く声が聞こえる。

× × ×

場内は村の人たちと結子の同僚たち。

岸田、紡音と目が合い一礼する。

× × ×

お別れの儀。

棺桶の蓋の小窓が開いている。

紡音、棺桶に近づき結子の顔を見る。

しかし、見ることを拒絶してしまう。

涙が溢れてくる。

紡音「（声を荒げる）」

村長、紡音の元へやってくる。

村長「最期の姿じゃ。見届けてやってくれ」

紡音、再び結子の顔を見る。

しかし、直視することができない。

涙が止まらない。

嗚咽している。

村長「紡音、頼む」

紡音、足が動けずしやがみ込む。

村長、紡音の肩を持ち無理やり棺の近くま

で体を寄せる。

村長「そげなことじゃ寂しいじやろうが！最

後なんじゃぞ！もう立派な大人だけんしっ

かりせんかい！！」

紡音、立ち止まる。

結子の顔を見る。

最期の顔は少し口角が上がっていて、

微笑んでいるように見えた。

紡音、再び涙が込み上げる。

紡音「お母さん、今まで迷惑かけてごめんね」
言葉に詰まる。

紡音「ありがとう、大好きだよ」

× × ×

式後。

紡音、村長の元へ行く。

紡音「さつきは取り乱しちゃってごめんなさい」

村長「わしの方こそ怒鳴ってすまんかったな」

紡音「ううん」

村長「結子ちゃんには最期の言葉伝えられた

か？」

紡音「うん」

村長「そりゃよかったの」

紡音「本当にありがとう」

紡音、とある若い男性が視界に入る。

村長に一礼して男性の元へ駆け寄る。

紡音「……葵くん？」

葵「……紡音」

紡音「なんで葵くんが」

葵「おばさんから聞いて」

紡音「そう」

葵のカバンのキーホルダーが揺れる。

紡音、それを見る。

葵「……結子さん、葵は元気にしてるかって、
毎年おばさんに聞いてたって」

紡音「そうだったんだ。知らなかった」

葵「うん」

紡音「今は？東京？」

葵「うん。仕事が」

紡音「私も東京。学校」

葵「そうなんだ」

遠くで誰かが紡音を呼ぶ声をする。

紡音「ごめん、行かないきゃ」

葵「……うん」

紡音、歩き始める。

葵「ねえ」

紡音「ん？」

葵「連絡先交換しよう？また会うかもだから」

紡音「あ、うん」

スマホを出し、LINEを交換する。

紡音「じゃ、またね」

紡音、去っていく。

○渋谷スクランブル交差点／夜／大晦日

日付が変わるのを待っている人々。

各所に警備員。

見知らぬ人同士が肩を並べている。

カウントダウンが始まる。

「10、9、8……」

声が重なっていく。

「3、2、1――」

歓声が上がる。

賑やかな様子の渋谷。

○紡音のアパート／同時刻

静かな部屋。

隅には『お母さん』と書かれた段ボール。

紡音、横になっている。

葵からLINEが来る。

葵（LINE）「あけおめ」

紡音、しばらく考えて、

紡音（LINE）「あけおめ」

葵から着信が来る。

紡音「もしもし？」

葵（声）「もしもし、今平気だった？」

紡音「大丈夫だよ、どうしたの」

葵（声）「なんか……久しぶりに会えたし、
東京いるならどっかいきたいなって思っ

紡音「え！う、うん。いいよ行こう」

葵（声）「知り合いが今度ミュージカル出る
らしくて、よかったら一緒にどう？」

紡音「え、すごい！知り合いが？すごいね、
いきたい！」

葵（声）「うん、じゃあまた日程とか連絡す
るね」

紡音「ありがとう、楽しみ」

○緒方のアパート／夜

葵と緒方、家飲みをしている。

緒方「葵ってさ、東京来てどのくらい？」

葵「12年くらい」

緒方「地元はどこ？」

葵「島根。って言ってもわからないか」

緒方「島根か」

葵「行ったことあるの？」

緒方「ない。何が有名？」

葵「出雲大社とか石見銀山とか」

緒方「縁結びだ」

葵「そう」

緒方「それで何で東京来たの？転校とか？」

葵「俺、8歳のとき母さん亡くなってて。そ

れからこっちにいるおばさんのとこに来た」

緒方「そっか」

葵「そういう顔しなくていいよ」

緒方「そういう顔って」

葵「気使い顔」

緒方「ごめん」

葵「謝らないで。俺にはこれがあるから」

葵、キーホルダーを取り出す。

緒方「何それ」

葵「母さんの形見」

○紡音のアパート／ミュージカル当日

紡音、準備が終わり部屋を出る。

テーブルの上に薬が置いてある。

○劇場・外観

本日公演のポスターが張り出されている。

○同・客席

葵と紡音、前から三列目の座席に着く。

紡音「こんなに近いんだ！こういうところ来るの初めて」

葵「そうなの？」

紡音「うん。なんか敷居高いイメージで」

葵「俺も最初はそう思ってた」

紡音「葵くんは慣れてるの？」

葵「うん。仕事柄」

紡音、フライヤーを開く。

出演者の一覧を目で追う。

紡音「どの人？知り合いつて」

葵「緒方亮……たぶんこのへん」

葵、フライヤーの一角を指す。

紡音「へえ……」

紡音、写真を見る。

紡音「かっこいい人だね」

葵「うん」

紡音「もうすぐ始まるよね？お手洗い行つて

くる」

葵「うん」

紡音、通路の階段を登っていく。

すると、履いていたヒールのかかと部分が折れてしまう。

慌てて拾い、トイレへ向かう。

○同・廊下

女性用トイレの前、長い列ができている。

紡音、列に並ぶ。

カバンの中から薬を探す。

薬が見つからない。

時計を見る。

開演まであと5分。

腹痛が治らない。

近くに多目的トイレがある。

使用中のランプはついていない。

紡音、入る。

× × ×

車椅子に乗った女性と、夫が多目的トイレの前で止まる。

使用中のランプが点灯している。

夫、ドアをノックする。

夫「すいません、急いでいるんですが……」
中から応答はない。

妻、表情が歪んでいる。

必死に堪えている。

夫「すいません、もう少しで出られますか」
また、ノックする。

夫「もうちょっと我慢できそう？」

妻「……」

夫「大丈夫？」

妻「あ……ごめんなさい」

妻、声を抑えて泣き始める。

車椅子の下から、水が落ちる。

夫、上着を脱いで車椅子の足元を覆う。

夫「大丈夫、大丈夫だから」

周囲の人が気づき始める。

× × ×

多目的トイレのドアが開く。

紡音、出てくる

周りがこちらに注目している。

上着で足元を隠す夫と、目が合う。

妻はうつむき泣いている。

紡音「えっ……」

夫、ゆっくりと立ち上がる。

紡音「あ、あの……女子トイレが混んで、

ヒールが折れてしまっ……」

夫「妻は、ここしか使えないんです」

紡音「……ごめんなさい」

夫「謝って済む話じゃないですけど。何か言

うことはないんですか」

紡音、言葉が出ない。

周囲の視線が集まる。

× × ×

葵、紡音を探している。

廊下の先に人だかり。

劇場スタッフ数人でその場の対応をしている。

紡音、車椅子に乗った女性と夫と共に別室に連れて行かれる。

葵、近くにいた女性に尋ねる。

葵「何があったんですか」

女性「（紡音を指さして）あの人が多目的トイレ使っている時に、車椅子の人が間に合わなかったんだって」

葵「え……あ、そうだったんですか。ありがとうございます」

○同・外／夜

葵、紡音を待っている。

紡音、出てくる。

ヒールが片方折れて歩きづらそうにしている。

葵「大丈夫？」

紡音「うん」

葵「家まで送るよ。タクシー呼ぶね」

○紡音のアパート前／夜

紡音と葵、タクシーに運ばれて到着する。

紡音「今日はごめんね」

葵「ううん、しっかり休んで」

紡音「ありがとう」

葵「じゃあね」

紡音「じゃあね」

○紡音のアパート／深夜

真っ暗な部屋。

スマホの画面が光っている。

✕に画像が投稿されている。

『多目的トイレを健常者が占拠。車椅子

の女性が漏らしてしまふ』

いいね、リポストが増え続けている。

スマホを伏せる。

○料理専門学校・ロッカー／翌日

紡音、ロッカーで実習服姿に着替える。

同期がスマホを見ながら何かを話している。

紡音、気づいていないふりをする。

同期△「多目的トイレのやつみた？」

同期B「見たよ。ありえないよね」

同期△「まあわかんなくもないけどね、めっちゃ並ぶ時あるし」

同期B「でもだからと言って本当にやるなんて迷惑すぎない？」

同期△「確かに」

紡音、マスクをする。

○同・実習室

生徒たちが、各自の調理台に立っている。

紡音、玉ねぎを切っている。

包丁が止まる。

指導教員の大畑、紡音の調理台で足を止める。

大畑「清野」

紡音「はい」

大畑「このソース、味見して」

紡音、スプーンでソースをすくう。

口に入れる。

紡音「……」

大畑「何が足りない」

紡音「……わかりません」

大畑「なぜだ」

紡音「……」

大畑「味が分からなくなるのも、手が止まるのも、全部繋がってる」

紡音「……」

大畑「料理人はな、自分の体が道具なんだ。

メンタルが手に出る。舌に出る」

紡音「すみません」

大畑「何があったかは知らんが、その顔で
厨房に立つな。お前が怖がっていると、食べる
人間にも伝わる」

紡音「……すみません」

大畑「……」

○同・廊下

昼休み。

紡音、1人で廊下の端のベンチに座っている。

コンビニの惣菜パンが膝に置いてある。

スマホで✕を見る。

一番上に自分の顔にモザイクがかかった
投稿。

スクロールする。

似たようなアカウントが似たような文章
で流れてくる。

スマホをベンチに置く。

○紡音のアパート台所／夜

紡音、マスクと帽子姿で帰宅する。

ケトルでお湯を沸かす。

カップ麺を台所に置く。

インターホンが鳴る。

紡音、動かない。

また鳴る。

しぶしぶ玄関前まで行き、扉を開けると、

葵が立っている。

コンビニの袋を持っている。

葵「やほ」

紡音「……なんで」

葵「たまたま近く通ったから」

紡音「どうぞ」

葵を部屋に入れる。

葵、異臭に気づく。

台所近くに置いてあるスーパーの袋を見る。

葵「（袋を指して）これ、もうダメみたいだよ」

紡音「あ……」

葵「大丈夫」

葵、袋を捨てる。

紡音「ありがとう」

葵「夜は？食べた？」

紡音「……食べてない」

ケトルのお湯が沸く。

葵、台所を見る。

カップ麺が置いてあることに気づく。

葵「こっち食べな」

コンビニの袋からおにぎりと味噌汁を差し出す。

紡音「え、いいよ。葵くんのは？」

葵「俺もあるよ」

葵、テーブルに他の食べ物を並べる。

紡音「じゃあ……ありがとう」

向かいに座る。

紡音、おにぎりを一口食べる。

紡音「……葵くん」

葵「うん」

紡音「この前の帰り、何も言わなかったよね」

葵「……どうすればいいか分からなかった」

紡音「うん」

葵「俺、近くの人があんなことになってるの初めてだったから」

紡音「私、あの時ものすごく怖くて……でも隣に葵くんがいてくれたから、大丈夫だった。だから感謝してる」

葵「……うん」

紡音「私、昔からよくお腹が痛くなるの。この前も初めての場所で少し緊張しちゃって」

葵「……薬は？飲んでるの？」

紡音「うん。でもこの前は忘れちゃって」

葵「そうだったんだ」

紡音「……だから私が全部悪いの」

葵「紡音には紡音の事情があるから、全部が悪いわけではないよ」

紡音「……」

葵「俺は味方だから」

○料理専門学校・廊下／日替わり

紡音、弁当を持って廊下の隅に向かおうとする。

さゆりから着信。

さゆり（声）「紡音！元気？」

紡音「……うん、元気だよ」

さゆり（声）「ネットで見たよ。あれ紡音でしょ」

紡音「……うん」

さゆり（声）「紡音が悪いとは思わんけど、一番しんどいのは紡音でしょ」

紡音「……」

さゆり（声）「ご飯ちゃんと食べとる？」

紡音「……最近、食べれてない」

さゆり（声）「じゃあ食べ物送る！東京も行くけんね！いっぱい食べよ！奢るけん！」

紡音「（笑いながら）ありがとう」

遠くで、大畑が紡音を呼んでいる。

紡音「あ、じゃあ私学校だからまたね。本当ありがとう」

電話を切る。

大畑「悪いな、急に呼び出して」

紡音「いえ」

大畑「最近のことなんだがな……こっちでいいか」

二人、講義室へ入っていく。

○同・講義室

紡音と大畑、座って話をする。

大畑「清野、最近なにか不安なことはあるか」

紡音「……はい」

大畑「実はな、（スマホを見せながら）この

投稿が学校内で話題になっていてな」

紡音「……」

大畑「これは清野なのか？」

紡音「はい」

大畑「何があったんだ」

紡音「……」

大畑「正直に言ってくれ」

紡音「……あの日、幼なじみの子と久しぶりに遊んだんですけど、緊張してお腹が痛く

なっってしまったて、そしたら女子トイレが混んでて、薬も家に忘れてしまつて。開演まで時間もなくて。ヒールも折れてしまつて……気がついたら多目的トイレに入ってしまった」

大畑「車椅子の方が来てるのは知らなかったのか」

紡音「……知りませんでした。出た時に初めて気づいて」

大畑「そうか」

紡音「でも、結果的に間に合わなかったのは私がいたからで……本当に申し訳なくて」

大畑「……向こうのご夫婦には、ちゃんと謝れたのか」

紡音「劇場のスタッフの方が間に入ってくださつて。その場でお詫びしました」

大畑「うん。清野、俺は責めるために呼んだんじゃない」

紡音「……はい」

大畑「清野がわざとやったわけじゃないのは

分かってる。ただ、ネットに出回ってる以上、学校としても把握しておかなきゃいけなかった」

紡音「……はい」

大畑「あと、この前の実習のとき」

紡音「……」

大畑「あのソース。本当に味が分からなかったのか」

紡音「……はい」

大畑「今まではわかってたのに」

紡音「……」

大畑「他人の目を気にすると、陥る現象だ。俺も若い頃、一度なったことがある。ミスして叩かれて、厨房に立つのが怖くなってな。しばらくの間、何を食っても同じ味が生じた」

紡音「そうだったんですか」

大畑「けどな、放つといたら治らなかった」

紡音「どうしたんですか」

大畑「食べ続けた。怖くても、手が震えても、

毎日キッチンに立った」

紡音「……先生も、怖かったですか」

大畑「怖かったよ。ただ、怖いより悔しかった。自分の舌が嘘つくのが許せなかった」

紡音「……私も、悔しいです」

大畑「なら、まだ大丈夫だ。しばらくは周りのことは気にするな。料理のことだけ集中しろ。今できることはそれだけだ」

紡音「……はい、ありがとうございます」

○紡音のアパート／夜

紡音、家計簿をつけている。

スマホの電卓で計算している。

隅にある『お母さん』と書かれた段ボールを見る。

ガムテープを剥がし開ける。

中には、アルバム、服、お菓子の缶が入っている。

お菓子の缶を開ける。

結子の電卓と、付箋でびっしりの求人誌、

ノート、学校のパンフレットが入ったクリ
アファイル。

その間に白い封筒が挟まっていた。

紡音「……？」

中を開けると結子からの手紙が入っていた。

結子（声）「紡音へ、急に手紙なんておべたで
しょ。お母さんもうあとどのくらい紡音と話
すことが出来るか分かんないからこの手紙
に残すね」

紡音「……」

結子（声）「まずは紡音、今まで元気に生きて
くれてありがとう。ちゃんと成人になった娘
を見る事ができるのは、お母さんにとって
ひとつ夢が叶ったようなものだけんね。でも
欲を言うなら紡音の旦那さん。見たかったな。
どう？最近はいいい人いるのかな。その人が将
来の旦那さんになるのかな。って気が早いかな
（笑）」

でも花嫁姿の紡音、きつと似合うと思うよ」

紡音「（笑っている）」

結子（声）「何年か前までは反抗期で、お母さんに迷惑ばっかかけて、本当にこの先社会でやっていけるんか不安だったけど今では夢も出来て立派な子に育ってくれたね。お母さん、まだあの日のこと覚えとるよ。

『料理人になりたい。お母さんのミートソースが頭から離れられん』って、あの時全身から涙が出るくらい嬉しかったけんね。あれからいつぱい勉強したね。

紡音があんな真面目に机に向かうなんて思ってもみなかった。それほどになりたい夢だったんだね。

学校はがんばっとる？

東京での生活は大変でしょ。

でももっと辛いこともこの先たくさんあると思う。

やめたくなる時も、逃げ出したくなる時もあると思う。

ひとりになって自分の弱さに苦しくなる時もあると思う。

でもね、紡音。

どんなことがあっても、紡音は私の自慢の娘。
お母さんにとつてなくてはならない存在。

生きているうちに出会えたことを誇りに思
ってる。

もしお母さんが生まれ変わったとしても、紡
音の母親でいたい。

大袈裟なことかもしれないけど心からそう思
ってるよ。

今お母さんが紡音に対して思ってることは、
何年何十年たっても変わることはないよ。

それだけは忘れんでね。

直接伝えとることは出来なかったけど、
生まれてきてくれてありがとう。

これからがんばってね。結子」

紡音「お母さん……」

紡音、泣いている。

泣きながら台所へ向かう。

玉ねぎ、にんじん、ひき肉を取り出す。

玉ねぎを洗い、皮を剥いでいく。

× × ×

紡音、みじん切りをする。

× × ×

紡音、にんじん、玉ねぎの順番でフライパンに入れていく。

玉ねぎの色をよくみている。

× × ×

紡音、フライパンにトマト缶、塩コショウ少々、コンソメ小さじ3、ウスターソース小さじ1を入れる。

鍋に200㍓の水を入れ、もう一つのコンロを点火する。

× × ×

鍋がぐつぐつ煮えている。

紡音、沸騰したお湯にパスタと塩適量を入れる。

インターホンが鳴る。

紡音「はい」

ドアを開けると、葵が立っていた。

葵「よっ」

紡音「おおーどうぞ」

葵「お邪魔します。ん？いい匂い」

紡音「今ちょうど作ってたの。食べる？」

葵「いいの？じゃあ、いただいちゃおうかな」

紡音「うん。待ってて」

× × ×

紡音、パスタを一本取り出し硬さを見る。

紡音「（頷く）」

パスタをザルにあげ水気を切り、盛り付ける。

パスタの上から、ミートソースをかける。

紡音「お待たせー」

葵「ありがとうございます。うわ！うまそう」

紡音「お茶でいい？」

葵「うん。ありがとう」

紡音、自分の分とお茶をテーブルに置く。

紡音「よし、じゃあ」

紡音・葵「いただきます」

葵、パスタをフォークに巻きつけ口にする。

紡音、葵が食べるのをみている。

葵「どうしたの」

紡音「おいしい？」

葵「めっちゃおいしい！」

紡音「よかった」

葵、バクバク食べる。

紡音、それを見ている。

葵「食べないの？」

紡音「え？ うん。食べるよ」

紡音、パスタをフォークに巻きつけ口に運ぶ。

すると、涙が出てくる。

葵「え、え、どうしたの」

葵、ティッシュを渡す。

紡音「ううん、ごめんね」

葵「……」

紡音「私ね、あのミュージカルの日から、味がわかんなくなつて料理をするのが怖くなつたの」

葵「うん」

紡音「それで料理人になる夢も諦めようか悩

んでただけど、やっぱりお母さんのことが頭に浮かんで……やめれなくて」

葵「うん」

紡音「それで、このミートソースを食べたら、お母さんの味を思い出して涙が止まなくて」

葵「うん」

紡音「私、やっとお母さんのミートソース作れるようになったんだって」

葵、泣いている。

× × ×

テーブルには食べ終えた皿がふたつある。

葵「……俺、ずっと間違えてた」

紡音「ん？」

葵「村の祭りで、みんなで編んだものを燃やすだろ」

紡音「うん」

葵「子供の頃、なくなるのに何で作るんだっ
て思ってた。お母さんに聞いたら、なくなっ
ても作った思い出は消えないって言ってた」

紡音「……」

葵「でも俺は、なくなったら終わりだと思っ
てた」

紡音「……」

葵「だけど、紡音がさっき言ってたことが、
お母さんが言いたかったことなのかもしれ
ないな」

紡音、葵のカバンについているキーホルダ
ーを見る。

紡音「……ねえ」

葵「うん」

紡音「そのキーホルダー、欲しい」

葵「え、これ？」

紡音「うん」

葵「ごめん、これは……」

紡音「わかってる。形見だよね」

葵「うん」

紡音「違う理由があって」

葵「ん？」

紡音「……そのキーホルダー、私のお母さん

も作ったと思うから」

葵「どういうこと？」

紡音「キーホルダーの編み方。毛糸の巻き方。

小学生の時にお母さんが私に教えてくれた
編み方と同じ」

葵、キーホルダーを手取る。

葵「いや、でも俺のお母さんが作ったはず」

紡音「……うん。でも、もしかしたら一緒に
作ったんじゃないかって」

葵「でも確かめる方法……」

紡音「ない」

葵「なんで一緒に」

紡音「お母さん、私が子どもの頃、葵くん
のことずっと心配しててね。お母さんも葵くん
のこと、本当の息子だと思っていたし、葵く
んのお母さんと一緒に形にして残したかつ
たんじゃないかって」

葵「……」

紡音「うちのお母さんって、そういう人だっ
たから。おせっかいで、直接言えないくせ

に、形にして残そうとする」

葵「……俺の母親も、そういうところあったかもしれない」

紡音「……」

葵「でも、やっぱりやれない」

紡音「いい」

葵「え？」

紡音「いらない。欲しかったのは、そのキーホルダーじゃなかった。ただ……お母さんに触れたかっただけかもしれない」

葵「結子さん、このキーホルダーを作るとき何か言ってた？」

紡音「うちのお母さんが言ったことは知らない。でも、葵くんのお母さんが言ったことは知ってる」

葵「なんて言ってたの」

紡音「2人で作ったほうが、丈夫になる気がしてって」

葵「ありがとう。教えてくれて」

紡音「ううん」

葵「あ、これ」

葵、カバンの中からチケットを取り出す。

葵「今度の舞台のチケット。みにきて」

紡音「え！すごい！葵くん俳優さんなの！？」

葵「あれ……言ってなかったっけ」

2人、笑っている。

○劇場・廊下

紡音、トイレの長い列に並んでいる。

○同・客席

紡音、客席に着く。

フライヤーをみている。

曾根葵の顔写真が載っている。

○同・舞台裏

葵、袖で待っている。

身体が僅かに震えている。

客席の話し声が聞こえる。

暗転と同時に客席が静かになる。

舞台へと一步、踏み出す。

○紡音のアパート

玄関にキャリーケース。

スマホから Mr. Children『Replay』が流れている。

紡音、ダンボールから結子の電卓を取り出し電源をつける。

微かに見える数字。角度を変えて操作する。家計簿をつける。

時計を見て、家を出る準備をする。

玄関を出る直前に引き返す。

机の上にある薬を持っていく。

○村の広場／夜

篝火が焚かれている。

2人で帰省した紡音と葵が、村人たちの中にいる。

村長が今年も篝火の前に立っている。

紡音の手に、編んだ靴下。

村長「さあ皆さんお手を拝借！村の安寧と皆
さまのご健勝、心の祈りを願って！よーっ！」

手を叩く音。

今年もずれた。

笑いが起きる。

篝火に編み物が次々と投げ込まれていく。

紡音、自分の作った靴下を手の中で握りしめる。

葵「……いいのか」

紡音「うん」

紡音、篝火に投げ入れる。

炎が一瞬大きく揺れ、また静かになる。

葵、ポケットの中からキーホルダーを出す。

軽く握りしめる。

燃やさない。

葵、紡音の隣に立つ。

2人、炎を見ている。

炎が揺れる。揺れる。揺れる。

完

【作中に出てきた実在する本】
楠山正雄『桃太郎』青空文庫

【使用楽曲】

・ Mr. Children 『Replay』

作詞・・桜井和寿 作曲・・桜井和寿

・ Mr. Children 『Another Mind』

作詞・・桜井和寿 作曲・・桜井和寿

・ Mr. Children 『終わりのなき旅』

作詞・・桜井和寿 作曲・・桜井和寿

・ Mr. Children 『くるみ』

作詞・・桜井和寿 作曲・・桜井和寿